偽りの涙

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偽りの涙

【Ｎコード】
Ｎ０４３２Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
古代ギリシア。哲学者アポロニウスは愛弟子の結婚式にコリントに入ったがそこで見たものは。これは実際にあったとも言われているお話です。

第一章

偽りの涙

ローマ時代に書かれたアポロニウス伝という本がある。この本に一つ面白い話がある。これはギリシアの哲学者アポロニウスについて書かれたものであるがその彼の話の一つである。

彼には一人の若く美しい弟子がいた。その名をユリシウスといい逞しい身体に豊かな黒髪を持っていた。身体だけでなく頭も優れたものを持っており師であるアポロニウスにも愛されていた。何時か彼に相応しい妻をと考えていたがそれより先に結婚の話が決まってしまったのであった。

「何じゃ、もう決まったのか」

「はい」

そのユリシウスがにこやかに笑ってアポロニウスの自宅で彼に言うのであった。

「コリントに住む方でして」

「ほう、コリントにか」

ギリシアの大都市の一つだ。アテネやスパルタに匹敵する繁栄を見せていた街である。

「そこの方ですが」

「一体どういった御婦人か」

アポロシウスは彼にそれを問うた。

「教えてくれぬか」

「未亡人の方でして」

「とすると年上じゃな」

「そうです」

ユリシウスはこうも答えた。

「いけませんか」

「それは構うことはない」

アポロシウスは相手の年齢には構わなかった。
「歳は関係ないのじゃ」
「左様ですか」
「大切なのはどういった相手かじゃ」
アポロシウスが見るのはそこであった。
「どういった相手じゃ。それは」
「まず人としては素晴らしい方です」
それを語るユリシウスの目は輝かんばかりであった。しかしアポロシウスはその目に輝きとは別のものも見た。まるで異形の者に魅せられているような妖しいものを含んでいたのだ。
「とてもお優しく美しく」
「美人であるのか」
「若くして御主人をなくされたそうですが」
彼はこうも師に述べた。
「その方と」
「それ程素晴らしい方なのじゃな」
「そうです」
うっとりとさえした声で師に語る。
「そのような方と結ばれるとは。私は幸せ者です」
「そうじゃな」
アポロシウスは一旦は弟子の言葉に頷いた。しかしそこにはいぶかしむものを含んでいたが有頂天になっているユリシウスはそれに気付いていなかった。
「わしも嬉しいことじゃ。そなたの幸福はな」
「有り難うございます」
「そしてじゃ」
ユリシウスはまた彼に問うた。
「式の時は呼んでくれるのかの」
「勿論です」
彼は満面に笑顔を浮かべて師にまた答えた。

「是非共来て下さい、絶対に」
「その言葉受け取ったぞ」
アポロシウスは真面目な顔でユリシウスに答えた。
「今な」
「はい、お待ちしています」
ユリシウスはその満面の笑みのままアポロシウスに答えてきた。
「楽しみしていますので」
「しかし。いい話じゃな」
アポロニウスはまずはこう弟子に対して言うのであった。
「祝福するぞ」
「有り難うございます」
「それが万全の相手であれば尚更じゃ」
「いえ、先生」
ユリニウスはここで師の言葉を笑って否定した。
「あの方は。この世のものとは思えない程の方でございます。ですから」
「安心していいのじゃな」
「御会いして欲しいのですよ」
彼の今の感情はできるだけ多くの人達に自分の愛する人を見てもらいたいという一種の自慢から来るものであった。それを抑えられなくなっていたのである。
「絶対にです」
「わかった。ではコリントじゃな」
「はい」
また笑顔で師の言葉に頷いてみせた。
「楽しみにしておりますので」
「わかった。それでは式の時にな」
「わかりました。それでは」
ここまで話してユリニウスはコリントに帰った。後に残るのはユリニウスだけである。しかし彼はどうにも浮かない顔をしているの

であった。
「妙じゃな」
ユリニウスの顔を思い出して呟く。
「あの目の奥にあったのは」
既にそれを読み取っていたのだ。彼の目の奥にあった何かに操られているかのような光に。鈍い光であったので気付くのは難しかったが彼はそれに気付いていたのである。これは深い見識と知恵を持つ彼だからこそであった。他の者には気付くものではなかった。
「どちらにしろ。式の時じゃな」
そう思い直しここでは落ち着くことにしたのであった。
「では。今は」
動かないことにした。ただじっとしていた。しかし考えてはいた。その考えの下で今後どうするべきか考えていたのである。
程なくして式の日となった。彼はコリントに来た。すると城門のところで衛兵が彼に声をかけてきたのであった。見れば屈強な兵士であった。
「若し」
「何じゃ」
その兵士に顔を向けて応えた。
「わしに何か用か」
「アポロニウス様ですか」
彼はこうアポロニウスに名前を尋ねてきたのであった。
「見たところお姿が御聞きした通りなのですが」
「そうじゃ」
アポロニウスは穏やかな声で兵士に答えた。
「如何にもわしがアポロニウスじゃが」
「左様ですか。お待ちしておりました」
兵士は彼自身からその言葉を聞くとにこりと笑ってみせてきた。そのうえでまた言ってきた。
「どうぞ。こちらへ」

「こちらへということはじゃ」
アポロニウスは今の彼の言葉でおおよそのことがわかった。
「そなたはユリニウスから頼まれごとを受けていたのか」
「はい、そうです」
兵士はにこりと笑って彼に答えてきた。
「先生はコリントにはあまり来られていないですね」
「確かにな」
実はその通りである。彼はコリントとはあまり縁がない。前にこの街に来たのはもう何十年も前のことである。だから忘れてしまっていることもかなりあるのも事実である。
「そういえば今見る風景も殆ど覚えがないのう」
「だからです。このままではユリシウス様のところに無事辿り着けるかどうかわかりませんので」
「それで案内してくれるというのじゃな」
「その通りです。宜しいでしょうか」
「是非共そうしてもらいたい」
アポロニウスはにこりと笑って彼に告げた。
「実はわしも今気付いた。この街について殆ど忘れてしまっているということにな」
「それでは」
「うむ、頼む」
あらためて彼に言う。

第二章

「ユリニウスの祝宴の場までな。よいな」
「はい。これが素晴らしい美しさの方でして」
「それはユリニウスから聞いておるが」
もうそれは知ってはいた。
「そこまでか」
「ギリシアの美しさとは少し違いまして」
「ふむ」
それを聞いてまた少し気付いたことがあったがそれは言わなかった。
「切れ長の目を持っておられます」
「するとあれじゃな」
切れ長の目と聞いてわかった。
「東の方が」
「そうですね。そうした感じです」
兵士もそうアポロニウスに答えた。
「どちらにしろギリシアのものではありません」
「異国の美女というわけか」
「しかも大層気前のよい方でして」
こうも述べてきた。
「私への謝礼も。これを」
「それは」
「御覧下さい、この宝石を」
兵士が見せたのは様々な色の輝きを持つ大きな数個の宝石であった。彼はそれをアポロニウスに見せてうっとりとさえしていた。
「これだけのものを下さったのです」
「宝石か」
「どうでしょうか」

「ふむ」
アポロニウスはその宝石をまじまじと見だした。そのうえでまた言う。
「一個よく見せてはくれぬか」
「ええ、どうぞ」
兵士もにこやかな顔で彼に答えた。
「御覧になって下さい」
「はい、それでは」
「うむ」
アポロニウスは兵士の手の中の宝石を一個取ってみた。それは真珠である。白く眩い光を放っている。その真珠を右の親指と人差し指で摘んでみる。そうして目で見ながら指で何かを計っていた。
「成程な」
「どうでしょうか、この宝石は」
「素晴らしいものじゃ」
思うことをここでは口に出さなかった。
「しかもかなりな」
「それ程までですか」
「話には聞いていた」
ここではその思っていることを少し言葉に含ませる。兵士に気付かれないように。
「しかし。実際に見るとはな」
「真珠を御覧になられたのははじめてで？」
「いや」
それは否定する。
「何度か見ておるぞ」
「左様ですね。それでどうして」
「何でもない。それでじゃ」
「はい」
話が戻った。

「アポロニウスのところに案内してくれるか」
「はい、それですね」
兵士もそのことを今思い出した。
「それではこちらに」
「うむ、頼むぞ」
「わかりました」
こうしてアポロニウスはユリニウスの祝宴の場に案内された。見ればそこにはもう多くの客達が招かれていた。皆そこで笑顔で酒に美食を楽しんでいた。
「おお、先生」
「もうはじまっておったのか」
「はい」
ユリニウスが笑顔でアポロニウスのところに来た。そうして彼に挨拶するのであった。
「ようこそ」
「うむ、元気そうで何よりだ」
「はい、それで私の妻ですが」
ユリニウスは早速そちらに話をやってきたのであった。
「御会いになられますか？」
「後でな。今は」
「お休みになられますか」
「コリントまで歩いて少し疲れた」
まずはこう弟子に対して述べた。
「馳走に美酒を頂きたい。よいか」
「はい。それではまた後で」
「うむ。ではワインに肉を頂こう」
そう言って顔には笑顔を作って杯を手に取った。そうして重さを測るが。やはりここでも彼の睨んだ通りの結果が出るのであった。

第三章

「やはりな。この杯も」
次に銀の豪奢な皿を手に取る。それもであった。全てが彼の睨んだ通りであったのだ。
「間違いないのう、これではな」
彼には全てがわかった。それでまずはユリニウスに言った通りに美酒に御馳走を楽しんだ。暫くするとまたユリニウスが彼のところにやって来たのであった。
「それでは先生」
彼は笑顔で師のところにまたやって来て声をかけてきた。
「今度こそ宜しいでしょうか」
「うむ。それにして」
「何でしょうか」
「御前は最初の頃からせっかちじゃったが」
ここでは純粋に苦笑いになっていた。
「今も全然変わっておらんな。困った奴じゃ」
「すいません」
「謝ることはない。しかしじゃ」
「はい」
ユリニウスに対して話を続ける。
「少し借りたいものがあるのじゃ」
「何でしょうか、それは」
「まずはこれじゃ」
自分の持っている銀の杯をユリニウスに見せてきた。
「杯をですか」
「そしてこれじゃ」
今度は側にあった銀の皿を。どちらも出してきたのであった。
「両方少し借りたい。よいか」

「別にいいですが」
ユリニウスは師に応えながらも少しいぶかしむ顔になっていた。
「また。そんなものをどうして」
「御前に見せたいものがある」
真剣な顔で述べてきた。
「そしてここにいるお客人達にもな」
「お客様にもですか」
「それでよいか」
ここまで話してあらためてユリニウスに問うのであった。
「別に悪いことではないからのう」
「はあ。別に構いませんが」
師のその行動の意味について考えながら、それと共にどうしてそんなことを言うのかわかりかねながら彼に対して答えるのであった。
「先生がそう仰るのなら」
「有り難い。では御前の奥方のところじゃな」
「はい」
ユリニウスの顔からいぶかしむものが消えて明るくはっきりしたものになった。
「それでは御願いします。こちらです」
「それ程素晴らしい方じゃな」
「まるで王族の様に気品があり」
「そうじゃろう」
何故かアポロニウスはそれを察しているのだった。
「女神の様に美しいです」
「そうであろうな。ではその御婦人を」
「ええ、是非共」
弟子に案内されて宴の場の中心に向かった。見ればそこには白い晴れの服に身を包んだ妙齢の美女が気品のある笑みを浮かべて立っていた。
黒く直線的な長い髪を垂らし黒く切れ長の強い光を放つ目を持つ

美女であった。そしてその鼻は高く肌はギリシア人のそれと比べるとやや褐色を帯びている。背は高く彫刻を思わせる容姿をしており自信に満ちたような姿を見せていた。そうした明らかに異国風の鮮やかな美女であった。

その美女がユリニウスの紹介でアポロニウスに紹介された。まずは彼女からその気品のある笑みで彼に挨拶をしてきたのであった。

「はじめまして」

「はい」

アポロニウスは彼女を見据えながら挨拶を返した。それが終わるとすぐにユリニウスがアポロニウスに対して言ってきたのであった。

「何度もお話していますが私の妻です」

「になる方じゃな」

「そうです。如何でしょうか」

言葉を訂正しながら師にまた問うのであった。

「この方は」

「美しいな」

それは素直に認めた。

「そうでしょう。これ程美しい方は私は見たことがありません」

それがユリニウスの自慢のようであった。しかしアポロニウスは今は笑ってはいなかった。警戒する顔でじっと美女を見ているだけであった。

「ですからこうして」

「人のものとは思えぬ」

ここでアポロニウスは言うのだった。

「全く以ってな」

「そこまで褒めて頂けるとは」

「違う」

だが今度は否定する言葉を出した。

「それはな」

「！？一体どうされたのですか？」

ユリニウスはここでも師の言葉の意味がわかりかねた。今度は目をしばたかせる。
「また。先生らしくもない」
「ユリニウス。そして皆様方」
だがアポロニウスは弟子のその言葉には答えずに彼と客人達に対して声をかけてきた。そうしてここでその両手にそれぞれ持っていた銀の杯と皿を上に掲げてみせるのであった。
「これは銀ですな」
「はい」
「確かに」
ユリニウスも客人達も彼の言葉に答える。
「それが何か」
「あるのでしょうか」
「とくと御覧あれ」
それがアポロニウスの彼等の言葉であった。そう言うと杯と皿を上に向けて放り投げて見せたのである。
「先生、何を」
「そんなことをすれば折角の銀に」
傷がつく、と皆言いたかった。しかしここで誰もが、アポロニウス以外は思いもしなかったことが彼等の目に映ったのであった。
何と銀の杯と皿が落ちて来ないのだ。そのままふわふわと羽根の様に左右に揺れる。そうしてゆっくりと地上に舞い降りようとしているのであった。
「これは一体・・・・・・」
「どういうことなのだ」
「これには事情があるのです」
アポロニウスは宙にふわふわと揺れる杯と皿を指差して周りの者に告げた。
「事情とは」
「これが人の仕業ではありませぬ」

次に美女を見た。人々の視線がそこに集まるのをわかったうえで。
「人の仕業ではないとすれば」
「異形の者。そう」
そして言う。
「ラミアの仕業です」
「ラミア！？まさか」
「そう、そのまさかです」
また周りの者に答える。そうしてラミアの説明をはじめるのだった。
「かつてエジプトの王女でありゼウスと結ばれ多くの子をもうけた絶世の美女。しかしそれに嫉妬したヘラにより子を、これから産む子も全て殺され眠りさえ奪われ半人半神の異形の魔物となり人を貪り食う魔物と化した女」
それがラミアなのであった。
「それこそがこの女なのです」
「馬鹿な」
ユリニウスが思わずそれを否定にかかった。
「ラミアなぞ。彼女が」
「では聞こう」
必死に否定しようとする弟子に対して問う。
「今の様に。舞う銀の食器はあるか？」
「それは」
「ないな。そういうことだ」
言葉はユリニウスにとってあまりに厳しいものであった。しかしアポロニウスが嘘を言うような人間でないことは弟子である他ならぬ彼が最も知っていることであった。
「そうですな」
アポロニウスは今度は婦人、つまりラミアを見た。そのうえで彼女にも問うたのである。
「貴女は人ではなく。ラミアですな」

「それは」
「誤魔化すことは出来ませんぞ。何故なら」
ここでもう一つ指差すものがあった。それは。
「貴女の影。それは」
「影！？一体今度は」
「何事なのか」
人々はアポロニウスの言葉にいぶかしむ。アポロニウスが指差したのはラミアの影であった。見ればその影というものは。

第四章

「なっ！！」
「これは！！」
「そういうことです」
ラミアの影を見て驚く人々。何とそこにあるのは人の影ではなかった。下半身が蛇になっている異形の女の影であったのだ。
「影は真の姿を映し出す。その影こそが貴女の真の姿ですな」
「うう・・・・・・」
「では私は今まで」
「そうだ」
ここに至りようやく真実を受け入れる気になったユリニウスに対して告げた。
「御前はもうすぐで食い殺されるところだったのだ」
「食い殺される、私が」
「ラミアは人を貪り食う魔物」
そうなってしまったのである。狂い魔物となったことによって。
「ならばわかるな。己がどうなったのか」
「はあ」
「さあ、ラミアよ」
アポロニウスはきっとラミアを見据えた。そうして彼女に告げるのであった。
「すぐに我が弟子の前から去るのだ。このコリントからも」
「そんな、私は」
「何かあるというのか？」
拒む素振りを見せたラミアに対してきつい調子で問う。
「私の言葉に。言いたいことがあるのなら何でも言うのだ」
「確かに私は魔物です」
ラミアは言う。

「しかし。それでも私は」
「どうだというのだ？」
「あの方を愛しています」
そう言うのだった。それと共に涙さえ流しだした。
「本当に。心から」
「そういえばラミアは」
「そうでしたな」
ラミアの涙を見たことにより周りの人々は考えを変えだした。彼等もまたラミアのことは知っているのだ。その悲しいいきさつを。そうして同情の心を芽生えさせたのである。
「元々は人でありましたな」
「ではこの涙は」
「先生」
ユリニウスも師に対して言ってきた。
「魔物とはいえ悔悟の心はあります。ですから」
「許して欲しいというのだな」
「はい」
素直に頭を垂れて述べたのであった。
「御願いできますか、それは」
「人の心に従えばそうなる」
それがアポロニウスの言葉であった。
「いや、そうするべきだ」
「では先生」
「しかし。駄目だ」
それでもアポロニウスはそれを否定するのであった。何としてもそれを認めないのであった。言葉には強い意志さえガンとしてあったのであった。
「これはな」
「それは。何故でしょうか」
「見よ」

アポロニウスは必死に自分に対して問う弟子に対してまたラミアの影を指差すのであった。
「また影ですか」
「そうだ。今言ったな」
弟子に対して述べる。
「影は真の姿を映し出すと」
「はい、今確かに」
忘れる筈がない。その通りだ。
「では。見てみるのだ」
そうしてまた影を見るように告げる。
「ラミアの影を。今どうなっているのか」
「影を。では」
「うっ・・・・・・」
「これは」
ユリニウスだけではなかった。他のそれまでラミアに対して同情的であったコリントの人々もまた言葉を失った。そのラミアの影は。
笑っていたのであった。下半身が大蛇の妖女が嘲るような笑みでいたのだ。ラミアは泣いていたが影は笑っていたのであった。
「こういうことだ。これがラミアなのだ」
「これが・・・・・・」
「何ということだ」
ユリニウスもコリントの人々も言葉がなかった。あまりにも異様な禍々しい影になっていたからだ。
「この銀や姿と同じなのだ。ラミアの涙は偽りなのだ」
「偽りなのですか。何もかもが」
「それは自分でもどうすることができないのだ」
哀れみも同情もなく。ラミアのことを言ってみせた。
「何故ならそれが魔物なのだからな」
「そうなのですか」
「それで」

「何ということか」
「二度は言わぬ」
アポロニウスはここまで話してまたラミアを見据えた。そうして勧告するようにして告げるのであった。峻厳な声で。
「立ち去れ。よいな」
「はい・・・・・・」
ラミアは今度は泣かなかった。項垂れるだけであった。しかし見れば影は憤怒の姿で神を振り乱していたのであった。
「今度もまた」
「影が」
「やはり魔物ということなのか」
「これは」
コリントの人々もその影は見ていた。そうして言い合うだけであった。
「影は全てを語る」
アポロニウスは言う。
「若しここで暴れ回るのならよし。しかしそれならば」
「それならば」
「最後に御前は死ぬことになるだろう」
全てを否定する言葉が発せられた。
「結局のところはな。若しくはわしが御前を滅する」
「・・・・・・・・・」
アポロニウスは本気であった。本気でラミアを滅ぼすつもりであった。そうして彼女にコリントからすぐに立ち去り弟子であるユリニウスの前から姿を消すように告げるのであった。有無を言わせぬ言葉で。
「よいな。それでは」
「わかりました」
ここに至り。ようやくラミアも頷くのであった。彼女としてもそうするしかなかったのだ。

「それでは。もうこれで」
「そのまま。砂漠へでも去るのだ」
アポロニウスは言う。
「誰も御前の姿を見なくともすむ砂漠へな。去るのだ」
「そうして永遠にですか」
「御前が死ぬまでだ」
また峻厳な言葉がラミアに与えられた。
「わかったな。それでは」
「はい・・・・・・」
最後に頷いて姿を消す。その瞬間にその場にあった食器もテーブルも料理も全て消えてしまった。後には何も残ってはいなかった。コリントの人々もこれには呆然とするばかりであった。
ユリニウスは危ういところを逃れアポロニウスは名を残した。しかしラミアがその後どうなったかは誰も知らない。砂漠で見たという者も聞かない。ただ後に砂漠で項垂れて泣くばかりの美女を蜃気楼の中で見たという話が残っている。これがラミアなのかどうかはわからない。しかしその話がラミアだとするとあの涙は奥底からの偽りのものであったのだろうか。それに答えられる者もいはしないのであった。

偽りの涙　　完

２００７・１・１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0432e/

偽りの涙

2010年10月8日15時04分発行